

## 展覧会のお知らせ

### ■常設展示

「小川原脩 土着と風土」

美術学校から終戦までの東京時代を除いて、その長い生涯の大半を故郷・倶知安での創作活動に費やした小川原脩。自身を育んだ郷里への想い、そして郷里の姿。小川原が表現した「土着と風土」を軸に画業を辿ります。

### ■企画展示

「嶋貫由紀子展 Flower kings 花の王さま」

オーストリア在住の美術家・嶋貫由紀子さんの個展です。ふしぎな形、土や砂、種などを使って自由に描かれたファンタジックな作品の数々をお楽しみください。

会期：開催中～平成 28 年 7 月 10 日（日）

## アート・イベントのお知らせ

### ■土曜サロン

小川原脩とシュルレアリスム②

「ダダからシュルレアリスム（超現実主義）へ」

日時：5月14日（土）14時～15時

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

ミュージアム・シネマ

「シャガール：ロシアとロバとその他のものに」（フランス・2003年・52分）

日時：5月28日（土）14時～15時10分

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

### ■地域文化講座

日時：5月18日（水）18：00～ 講師：伏木田光夫 氏（画家）

会場：当館ロビー 聴講無料

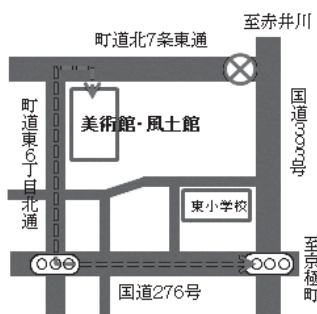
※広報4月号で18：30～となっております。お詫びして訂正いたします。

### ■町道通行止めによる迂回路について

国道393号の改良工事により、平成28年6月上旬頃から10月下旬頃まで美術館・風土館の駐車場入り口に面する北7条東通と国道393号との往来ができません。

京極町方面、赤井川方面からお越しの際は、国道276号から東6丁目北通を迂回してお越しくください。

国道5号線方面からは、工事による規制はありません。



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

5月の休館日

6日、10日、17日、24日、31日

### 美術館長から

ル・クレジオというフランス人のノーベル文学賞作家が来日した際、インタビューに答えて、こんなことを話しています。「人間には文学が必要不可欠であり、人間は文学なしではできない。それが口承であれ、紙に書かれたものであれ、タブレット端末の画面に映るものであれ、文学という鏡を通してのみ、人間は自分を見つめ、他者を眺めることができるのだから」。これは、まさしく美術にもあてはまることでしょう。キャンバスに描かれた絵画はもとより、街角のファッションであれ、コンピューターグラフィックであれ、さらには雑誌のグラビアでさえも、美術と切り離された生活は考えられませんよね。

館長 柴 勤

### 海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】

木田金次郎美術館「額縁の秘密」展

木田作品とともにある「額縁」に焦点をあて、多種多様な額縁が存在する経緯と、木田金次郎美術館のコレクションの成り立ちを紹介します。会期：開催中～7月3日（日）

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

# 感動一点 の場

『濃霧地帯』

1971年 小川原 脩 画



5月。街中では雪解けも終わり、リラ冷えとは言いつつもほどなく訪れる初夏の気配に、心はずむ季節である。ところが、山へ目を向けると高い所にはまだ残雪がたっぷりある。山行を楽しむ人や、車で峠越えをする人は、この残雪によって発生する濃霧に出くわした経験があるかもしれない。目の前は真っ白、数メートル先の物を確認するのがやっと。前後左右、自分の進む方向やスピードも見失う。大変危険な状況である。

小川原脩が描いた濃霧の世界では、馬が一頭、顔も上げずに進んでゆく。頑丈な体躯にぴったりと首を添わせ、大きな塊となって強風にも耐えているようだ。かろうじて前足を一步踏み出すが、後ろ足は踏ん張ったまま、ゆっくりと、それでも前へ進んでゆく。馬と一緒に描かれているのは、3本の樹木である。この姿もまた、長い年月の風雪に耐えて曲がりかねた枝。いまだ芽吹きすら迎えていない山奥の遅い春を思わせる。

濃霧イコール白の世界という既成概念を飛び越え、この作品の画面にははっきりとした青、赤、黄が大きく使われている。しかし、所々に使われた透明感のある水色が、まるで馬と木々が濃霧に溶け込んでゆくようだ。不思議な臨場感に見る者を引き込む作品である。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

## ふる探訪 さと

### —エゾタンポポ受難—

398回

大地を広く厚く覆っていた積雪も、平地ではすっかり消えた。庭、畑、そして路傍を彩るタンポポの緑と黄が目についた。

タンポポの仲間には他の植物に先駆けて開花する。前年の秋には株の真ん中に花芽を備え、冬を越して雪が消えると、直ぐに花を咲かせる作業に入るからだ。スタートダッシュに命運をかけていると言えるだろう。

さて、私たちの身の回りで見られるタンポポは、全部と言っていいほどセイヨウタンポポである。セイヨウタンポポは、北海道開拓使が明治時代に野菜として北米から導入し、札幌農学校の農場で栽培を始めた。そこから道内を始めとして全国に広がった。

一方で、日本には在来のタンポポがあちこちに分布している。九州にはシロバナタンポポとキュウシュウタンポポが、関西にはカンサイタンポポ、関東地方のカントウタンポポ、そして北海道のエゾタンポポなどなど。世界レベルでも、各地にその場所にしかないタンポポが見られる。どうやらタンポポは、盛んに新しい種を生み出しているグループらしい。だから容易に種間で交雑が起こる。



明治時代に導入されたセイヨウタンポポは、各地で在来のタンポポと交雑することで、またたく間に全国に広がって行った。交雑したタンポポは、驚いたことにセイヨウタンポポの姿をし、その性質を表す。つまり私たちの身の回りのセイヨウタンポポは、実際にはエゾとの交雑個体なのだ。いまや純粋なエゾタンポポを確実に見ることができるところはごく一部になってしまった。何万年にわたるエゾタンポポの進化は、ほんの百年たらずで大きく壊されてしまったかに見える。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）